

品種の多様化が進む日本の野菜

一般財団法人いも類振興会 理事長

すずき しょうじ
鈴木 昭二

日本においては、多種、多様な野菜が流通しており、現在、国内で栽培され、市場に出荷されている野菜の数は、いも類を含め約30科150種類と推定されるが、この数は海外からの新規野菜の導入などにより更に増加の傾向にある。また、これらのうち、主要野菜の品種数は、「野菜品種名鑑（2017年版）」によれば、約9,200品種とされ、その数は、研究機関、種苗会社等による育種技術の進歩や市場ニーズの変化のなかで、毎年250～300品種の増加がみられ、著しく品種の多様化が進んでいる現状にある。

日本の野菜のルーツ

このように、日本の消費者は多様な野菜品種を享受しているが、これらの野菜の大部分は時期の早晩はあれ、外国から渡来、導入されたものである。調査によれば、日本に自生または日本が自生地の一部である野菜は、ウド、ジネンジョ、セリ、フキ、ミツバ、ミョウガ、ワサビなど20種類弱に過ぎないとされている。

一方、現在、豊富に流通している野菜についてみれば、早いものは7世紀に始まる遣隋使などによって中国から渡来したといわれ、ダイコン、マクワウリ、カブなどは日本人の歴史とともに存在したものと推定される。次いで、カラシナ、ショウガ、ナ

ス、ゴボウなどの渡来も千年以上前のこととされ、その渡来元は中国・朝鮮半島である。戦国時代末期から江戸時代にかけては中国・朝鮮半島のほか南蛮渡来が加わり、ニンジン、キュウリ、スイカ、和種カボチャ、東洋種ホウレンソウに加え、17世紀初頭にサツマイモが沖縄に導入され、ジャガイモが長崎に渡来したことは周知のこととなっている。

更に、幕末・明治初期には外国人居住者ととともに渡来したものの、時の政府が政策として導入したものが加わっている。この中にはキャベツ、ハクサイ、タマネギ、西洋種ホウレンソウ、トマト、レタス、メロン、イチゴなど現在の主要野菜の多くが含まれており、これらは年月をかけて定着し、日本の野菜となっていくものである。例えば、トマトは南米（ペルー等）から、ヨーロッパ経由で明治時代初期に日本に導入されたが、その後品種改良が進められ、昭和55年のトマト品種数は280だったものが平成29年には630品種に倍増し、原種とは大きく異なる日本品種となって定着し食卓を楽しませている。

品種改良による多様化

このように日本野菜のルーツは大半が外国から渡来、導入したものであるが、これ

の定着には官民協力した品種改良や計画的な採種が行われ、日本独自の野菜として多様で高品質な種苗が開発普及されてきている。この結果、日本の野菜種子は昨年には先進国や途上国へ110億円を超える輸出產品となるほどの強い競争力を持つに至っている。

こうした発展は、高い育種技術力に支えられてきたと言えるが、特に、一代交配種(F1)の利用技術が確立されるに従い品種改良が加速されてきている。このF1技術の導入により、優良な品種特性を比較的容易に他の品種に導入することが可能になり、消費者、市場の多様なニーズに応えられるようになってきている。このため、種苗会社は競ってこのF1技術を用いて育種を行い、主要野菜についてみれば、種苗会社育成の大半がF1品種となり、それが品種の多様化の一因ともなっている。

しかしながら、F1品種の種子は、農家が栽培し易いこと、遺伝子組み換え(GM)やゲノム編集技術の利用よりは消費者に受け入れられ易いという反面、固定種が多い伝統野菜を駆逐し、有用な遺伝資源を消失させるという指摘があり、これについても留意していく必要がある。

いも類品種の多様化

一方、いも類についてみれば、ジャガイモは17世紀中頃長崎に伝来し、その後、徐々に救荒作物として広がりを見せたが、本格的に普及したのは明治2年に北海道開拓使が設置され、欧米からジャガイモ38品種を導入してからである。また、明治34年に北海道農事試験場が設置されるまでは民間に

よる導入が多く、現在も青果用主力品種として栽培される「男爵薯」、「メイクイン」なども明治末期から大正初期に欧米から導入普及されたものである。その後は国内の試験研究組織の体制も整い、青果用、加工食品用、でん粉用などの多様な国産品種が育成されて現在に至っており、農研機構種苗管理センターで生産した原原種数は、平成元年の22品種から、平成28年度には84品種に増加するなど栽培品種の多様化が進んでいる。

サツマイモについては、17世紀初頭に沖縄に導入されて以来、19世紀にかけて九州から北上し、北海道を除く全国に急速に広まっていったが、この間の栽培品種については資料を見る限り詳細は明らかではない。しかし、その遺伝的多様性や外来品種の導入により品種は増加し続け、明治時代後期には300品種程度はあったといわれる。その中でも代表的な在来品種は、昭和7年の統計によれば「源氏」、「七福」、「紅赤」、「花魁」、「太白」の5品種で全作付面積の70%を占めたとされている。

更に、大正初期から組織的な人工交配が沖縄県で開始され、数多くの交配品種が生み出されてきたが、その中からは大体20年サイクルで時代を代表する品種が育成されてきている。例えば、昭和20年に「高系14号」、41年に「コガネセンガン」、59年に「ベニアズマ」、平成19年には「べにはるか」が育成されてきた。このような品種開発の流れの中で、「べにはるか」育成から10年が経ち次の世代を代表する特性を持った、柱となる品種がいつ育成されるか期待が高まるこの頃である。